塩化ナトリウム系混合溶融塩による燃料電池用チタン系非白金触媒の 形態制御と革新的高性能化

千坂 光陽

弘前大学大学院理工学研究科

概要

固体高分子形燃料電池は自動車用動力源として既に実用化されているが、その生産台数は業界で年間数千台に留ま る。電極に用いられている白金系触媒の希少性と炭素担体の低い耐久性は、燃料電池車本格普及への障壁となりうる。 助成研究者らは白金触媒と炭素担体をいずれも用いないチタン系非白金触媒をこれまで報告してきたが、その形態は粒 子で十分に制御できていなかった。本研究では新たに溶融塩法を利用して、繊維状酸化チタン担体を合成した。合成に 用いる溶融塩種や合成温度などを検討し、825℃のNaCl-(NaPO₃)。混合溶融塩中でTiO₂ナノ粒子を成長させることによ り、アスペクト比が 50 程度の酸化チタンナノチューブ(TNT)が得られた。TNT を担体として用い、簡易燃焼法により窒素 原子を酸素サイトに置換導入した酸化チタン触媒を合成した。これまでに報告した水熱法由来の酸化チタンファイバーと 異なり、窒素原子の置換導入後もチューブ形態を維持し、酸素還元触媒として機能することが示された。酸化チタンチュ ーブが窒素原子を置換導入した後に粒子化することが他の研究グループからも報告されており、チューブ形態を維持す るメカニズムは未解明であるものの、溶融塩法の優位性が確認された。酸化チタンチューブは燃料電池触媒以外にガス センサ、光触媒、太陽電池など様々な分野での利用が検討されており、新たな応用も期待される。

1. 研究目的

近年自動車からの排出ガスに対する規制が世界的に 強化されており、今後 20 年程度で運輸部門の電動化が 急速に進むと考えられている。米国では自動車メーカー に対して、総販売台数の 1/4 超を占める 12 州において、 ハイブリッド車も含まないゼロエミッション車の販売比率が 義務付けられてきた。欧州連合加盟国では乗用車の走行 距離あたり二酸化炭素排出量が規制され、2021 年に 95 グラム/キロメートル、2030 年には 60 グラム/キロメート ルと強化される。これを満たさない場合のペナルティーは 十分大きいが、経済規模の大きいフランス・イギリス・スペ インでは、さらにより踏み込んだ独自規制が導入される。 上記三か国では 2040 年にかけて、ガソリン車・ディーゼル 車・ハイブリッド車等の新規販売が禁止される見通しであり、 インドでも同様の規制が検討されている。 これら世界中の排出ガス規制をクリアする自動車は、リ チウムイオン電池(Lithium Ion Battery, LIB)に代表され る二次電池駆動の電気自動車(Electric Vehicle, EV)と、 固体高分子形燃料電池(Polymer Electrolyte Fuel Cell, PEFC)を動力源とする燃料電池車(Fuel Cell Vehicle, FCV)である。FCV は EV に比べ、500 km 超の長距離走 行やバス・トラック等の高負荷運搬に優位である^[1]。セダン タイプの FCV が 2014 年 12 月に国内で、翌 2015 年には 米国、ドイツなどで相次いで一般販売されたが、その生産 台数は業界で年間数千台に留まる。強酸(pH < 1)かつ高 電位の正極にて、式 1 に示す酸素還元反応速度が小さく、 現状は多量の自金ーコバルトナノ粒子触媒を付着(担持) したカーボンブラック(PtCo/C)を要する。

 $O_2 + 4H^+ + 4e^- \rightarrow 2H_2O - --- \overrightarrow{r} 1$

自動車メーカーから公表されていないものの, セダンタ イプの FCV には, 競合他社が少なく見積もっても約 22 g の白金が搭載されている^[2]。一方同等サイズのガソリン車 に搭載されている排出ガス浄化用白金族金属は、約5g である^[3]。またガソリン車の排出ガス浄化触媒としては、白 金のみならずパラジウムも使われているが, FCV の触媒と して単独でパラジウムを利用することはできない。2018 年 の世界白金生産量は180トンであり[4],前述の白金使用量 では、818 万台の乗用車しか生産できない。同年の世界 自動車生産台数は,バス・トラック等の大型車を含めて 9.571 万台であり^[5], FCV 本格普及期には現状の白金使 用量から1/10以下への大幅な低減が求められる。炭素材 料は安価で導電率の高い優れた触媒担体であるが,自 動車の起動・停止時においては、式 2 に示す反応が生じ 腐食するため,現在は高コストなシステムで正極電位を制 御している[6]。

白金触媒の希少性と炭素担体の低い耐久性はFCV本 格普及への大きな障壁と言えるが,正極用白金代替触媒 の種類は非常に少なく,過去十年に出版された論文の9 割超は所謂 Fe-N-C 系材料について報告している。同触 媒は白金に迫る非常に高い初期特性を示すが,燃料電 池車の起動停止時においては式2により体積の大部分を 占める炭素成分が気化し,完全に触媒活性を失う^[7]。助 成研究者らはこれまで報告例は少ないものの,PEFC 正極 で安定な酸化物系材料に着目した^[8]。近年白金のみなら ず炭素担体をも用いないチタン酸窒化物(TiO_xN_y)触媒を 報告した^[9]が,その形態は粒子状で制御できておらず酸 素ガスを反応サイトに十分に供給できなかった。本助成研 究では,水電解触媒の合成方法として利用されてきた溶 融塩法^[10]を新たに燃料電池用本触媒合成に応用し,触 媒の繊維化・高性能化を試みた。

2. 研究方法

2.1 繊維状酸化チタンの合成

溶融塩法^[10]を改良し、アスペクト比が 10 程度以上となることを目的に繊維状酸化チタン(TNT)を合成した。TiO₂、

NaClとNa₂HPO₄もしくはNa(PO₃)₆をメノウ乳鉢で擂潰・混合した。得られた混合物をアルミナボートもしくはジルコニアるつぼに入れて、大気雰囲気下で加熱した。室温まで冷却後、温水を用いた洗浄を繰り返し、遠心分離した。

2.2 TNT を利用した触媒の合成

TNT, TiOSO₄・nH₂O (n = 1 - 2) と尿素を原料として, 簡易燃焼法^[11]を用い触媒を合成した。質量比を TNT: TiOSO₄・nH₂O 由来のTiO₂:尿素 = R:1:100とし, Rは1, 5, 20 として三種類の触媒原料を作製後, 850°C で加熱し た。

3. 結果と考察

3.1 溶融塩法に用いる容器と混合塩種の選定

図1にNaCl-Na₂HPO₄混合塩を用いて作製したTNT のX線回折パターンを、図2にエネルギー分散型X線分 光スペクトルを示す。加熱時にアルミナボートを利用する とNaAlTi₃O₈相が生成し、原材料とボートが反応したと考 えられる。NaAlTi₃O₈相は洗浄を繰り返しても除去できな い一方、ジルコニアるつぼを利用することでルチル型 TiO₂相が生成し、ジルコニアは原材料と反応せずTNTの 結晶構造に影響しないことがわかった。エネルギー分散 型X線分光スペクトルからも、アルミナボート由来と考えら れるAl/Siピークと原料由来のNaピークが無くなり、ジルコ ニアるつぼを用いたことで不純物が除去できたと考えられ る。図3に原料のTiO₂粒子とジルコニアるつぼを用いて 合成したTNTの電界放出型走査電子顕微鏡像を示す。 溶融塩中で形状が繊維化したことがわかった。

Beyene らは 2018 年に, 混合塩種が TNT の形状に与え る影響を探索した^[12]。 800°C においては NaCl-(NaPO₃)6 混合塩を用いることで酸素イオンの活性を下げて TiO₂ 粒 子の溶解度を上げ, 溶融塩中で TNT の結晶成長を促進 してアスペクト比を 15.3 まで高められることを報告した^[12]。 本研究でも Beyene らの報告を参考に, NaCl-(NaPO₃)6 混 合塩を用いて 900°C にて合成した TNT の電界放出型走 査電子顕微鏡画像を図 3(c)に示す。図 3(b)に比べアスペ クト比が幾らか向上しており, (NaPO₃)6 は Na₂HPO₄ に比べ 繊維化を促進することが確認された。





図1TiO₂粒子とNaCl-Na₂HPO₄混合塩を(A)アルミナボー ト(B)ジルコニアるつぼに入れて900°Cで合成したTNTの X線回折パターン

図2TiO2粒子とNaCl-Na2HPO4混合塩を(A)アルミナボー ト(B)ジルコニアるつぼに入れて900°Cで合成したTNTの エネルギー分散型X線分光スペクトル



図3(a) TiO2粒子とこれを用い(b) NaCl-Na2HPO4混合塩、(c) NaCl-(NaPO3)6混合塩中で900°C にて合成したTNTの電界放出型走査電子顕微鏡画像

3.2 温度が TNT の形態に与える影響

よりアスペクト比を向上させるため,温度が TNT の形態 に与える影響を探索した。図 4(i)と(ii)に,それぞれ 825℃ と 867℃の NaCl-(NaPO₃)₆混合溶融塩中で合成した TNT の電界放出型走査電子顕微鏡画像を示す。図 3(c)に比 べ大幅にアスペクト比が向上した。825℃ で合成した TNT のアスペクト比は凡そ 50 であり, Beyene らの報告値^[12]の3 倍程度となった。Beyene らの合成温度 800℃ より高温の ため,825℃から 867℃の温度域で成長が促進されたこと が示唆された。一方 900℃ まで上げると熱処理時の質量 損失率が大きく,溶融塩が一部蒸発して図 3(c)に示す通 り TNT が凝集したと考えられる。

3.3 TNT を用いた触媒の高性能化

825℃ で合成した TNT を担体として利用し, 簡易燃焼 法により TiO_xN_y-TNT 触媒を合成した。電界放出型電子 顕微鏡画像を図5に、回転電極ボルタモグラムを図6にそ れぞれ示す。内部は空洞でチューブであるTNT 表面へ, 粒子状のTiO_xN_yが担持された。従前の水熱法由来の TNT は、窒素原子を置換導入する際に繊維形状が失わ れ粒子化した^[11]が、本研究で合成したTNTに同じ簡易燃 焼法でTiO_xN_yを担持しても形状を維持することがわかっ た。Fuらも四塩化アンモニウムを利用した窒素原子の置 換導入により、TNTが粒子化することを報告しており^[13]、 繊維形状を維持するメカニズムは未解明であるが、本研 究で利用した溶融塩法の形状維持に関する優位性が確 認された。

一方 R の低下により触媒活性が向上し, TNT の導電率 に改善の余地があることが示唆された。







図5 TiO_xN_y-TNT(R = 20)触媒の電界放出型走査電子顕微鏡画像



図 6 TiO_xN_y-TNT(R = 1, 5, 20)の 0.1 M H₂SO₄溶液中にお ける回転電極ボルタモグラム

触媒使用量:0.86 mg cm⁻² 回転速度:1500 rpm 掃引速 度:5 mVs⁻¹

4. まとめ

溶融塩法を利用し, TNT を合成した。合成時に用いる 容器, 溶融塩種と合成温度を検討し, 825℃ のジルコニア るつぼ内 NaCl-(NaPO₃)₆ 混合溶融塩中で TiO₂ 粒子を成 長させることにより, アスペクト比が 50 程度の TNT が得ら れた。これを燃料電池における非白金触媒担体として応 用し, 初めて窒素原子の置換導入後も粒子化せず触媒と して機能する繊維状材料が得られた。

5. 文 献

- U. Eberle and R. von Helmolt, "Sustainable transportation based on electric vehicle concepts: a brief overview," Energy Environ. Sci., 3, 689–699 (2010).
- [2] O. Gröger, H. A. Gasteiger and J. P. Suchsland, "Review—Electromobility: Batteries or Fuel Cells?" J. Electrochem. Soc., 162, A2605–A2622 (2015).
- [3] U. S. Department of Energy, Office of Energy Efficiency and Renewable Energy, Program Record 16006, Platinum Group Metals (PGM) for Light-Duty Vehicles.

https://www.hydrogen.energy.gov/pdfs/16006_pgm_li ght_duty_vehicles.pdf

- [4] U. S. Geological Survey, Mineral Commodity Summaries 2020. https://pubs.usgs.gov/periodicals/mcs2020/mcs2020.p df
- [5] 日本自動車工業会,世界各国/地域の四輪車生産 台数:

http://www.jama.or.jp/world/world_t2.html

[6] U. Eberle, B. Müller and R. von Helmolt, "Fuel cell electric vehicles and hydrogen infrastructure: status 2012" Energy Environ. Sci., 5, 8780-8798 (2012).

- [7] C. Choi, C. Baldizzone, J. P. Grote, A. K. Schuppert, F. Jaouen, and J. J. Mayrhofer, "Stability of Fe-N-C Catalysts in Acidic Medium Studied by Operando Spectroscopy," Angew. Chem. Int. Ed., 54, 12753–(2015).
- [8] M. Chisaka, "Transition Metal Oxide, Oxynitride, and Nitride Electrocatalysts with and without Supports for Polymer Electrolyte Fuel Cell Cathodes," in T. Maiyalagan and V. S. Saji (Eds), Electrocatalysts for Low Temperature Fuel Cells: Fundamentals and Recent Trends, Wiley-VCH, Weinheim, p.423-441 (2017).
- [9] M. Chisaka and H. Morioka, "Phosphor and Nitrogen Co-doped Rutile TiO₂ Covered on TiN for Oxygen Reduction Reaction in Acidic Media," Catal. Sci. Technol., 9, 611–619 (2019).
- [10] B. Liu, H. M. Chen, C. Liu, S. C. Andrews, C. Hahn and P. Yang, "Large-Scale Synthesis of Transition-Metal-Doped TiO₂ Nanowires with Controllable Overpotential," J. Am. Chem. Soc., 135, 9995–9998 (2013).
- [11] M. Chisaka, Y. Ando, Y. Yamamoto and N. Itagaki, "A Carbon-Support-Free Titanium Oxynitride Catalyst for Proton Exchange Membrane Fuel Cell Cathodes," Electrochim. Acta, 214, 165–172 (2016).
- [12] A. M. Beyene, C. Baek, W. K. Jung, P. Ragupathy and D. K. Kim, "Understanding the role of oxygen ion (O2–) activity in 1-D crystal growth of rutile TiO2 in molten salts," CrystEngComm, 20, 487–495 (2018).
- [13] J. Fu, Y. Tian, B. Chang, F. Xi, X. Dong, "Facile fabrication of N-doped TiO₂ nanocatalyst with superior performance under visible light irradiation," J. Solid State Chem., 199, 280–286 (2013).

Morphology Control and Innovative Performance Enhancement of Titania-based Non-platinum Catalyst for Fuel Cells by Using NaCl-based Mixed Molten Salts

Mitsuharu Chisaka

Department of Sustainable Energy, Hirosaki University

Summary

N Oxide catalysts have been developed to replace platinum-group-metal catalysts in polymer electrolyte fuel cell cathodes while the oxygen reduction reaction (ORR) activity remained moderate. Recent breakthrough in the ORR activity was achieved by replacing the carbon supports with hydrothermally synthesized Ti_4O_7 fibers while the fibrous morphology was broken to form particles during the nitrogen-doping process owing to the harsh conditions. In this study, titania nanotubes (TNTs) were synthesized under a molten-salt flux. Effect of the crucible components, molten salt types and synthesis temperature on the TNT's morphology were investigated. The TNTs with a high aspect ratio of ~50 were successfully grown from TiO₂ nanoparticles in a mixture of NaCl and (NaPO₃)₆ at 825°C. They were durable against nitrogen doping not to be broken to particles and exhibited ORR activity in acidic media.